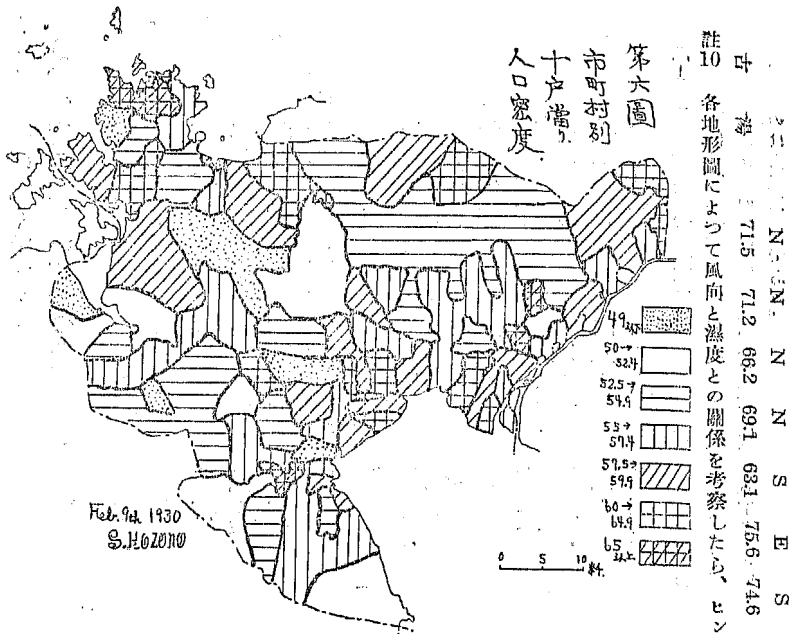


佐賀縣の地理 (三)

小 園 榮

鳥 嶺	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	N	N	N	N	N	S	S	E	N	NE	N	N
神 埼	74.9	74.4	70.9	70.9	69.9	78.7	77.4	74.5	76.8	73.8	77.0	69.9
	NW	NE	NE	NE	NE	S	S	NE	NE	NE	NE	NE
佐 賀	73.7	71.4	63.3	69.2	69.3	77.5	78.0	76.7	75.6	71.7	73.7	73.4
	N	NE	NE	N	NE	S	S	NE	NE	N	N	N
小 坡	76.3	81.0	69.7	61.9	71.4	76.5	76.8	72.6	73.0	69.6	71.3	74.1
	SE	SE	SE	SW	SW	NE	NE	SW	SE	SW	SW	SE
鹿 津	73.0	71.5	67.2	65.3	65.4	74.6	75.1	70.5	72.9	69.7	71.0	70.9
	N	N	N	N	N	N	S	N	N	N	N	N
伊 萬 里	76.1	73.9	71.4	72.3	73.6	79.8	74.9	73.9	76.7	74.3	73.9	75.4
	N	N	N	N	N	N	S	S	N	N	N	N
武 雄	76.9	77.0	71.5	75.6	72.7	80.1	78.9	76.0	77.3	72.1	73.3	77.6
	W	W	W	W	W	E	S	S	W	W	E	W
鹿 島	74.0	73.3	66.1	68.5	67.6	74.4	73.1	63.9	72.4	68.6	71.5	72.5
	W	E	E	E	E	E	E	E	E	E	W	W
野 野	79.3	77.3	74.6	74.8	73.8	81.3	81.1	80.2	73.3	73.9	76.8	77.9
	W	N	N	N	N	N	S	N	N	N	N	N
	79.2	76.3	71.2	71.7	68.3	77.1	78.9	74.4	74.6	73.9	78.6	78.9



第六圖は市町村別十戸當り人口密度分布圖である(昭和元年)。縣平均は五十四人一分である註1。筑紫平野の農業區は概して密度が大きいが、多良岳火山裾野、大町・北方・嚴木・相知・北波多・西山代の炭坑地、武雄・嬉野の温泉地、有田の陶工地及び唐津町・值賀村等は小さい。脊振山地の三瀬・北山の兩村は各六十三人八分、五十九人二分と大きな密度を有することは注目すべき事項であらう。此の項の説明に就いては多大の困難を感じてゐる。御指教を仰ぎ度し。密度の大きな町・村と小さい町村

- 三、土地の利用
- 四、産 業
- 五、交 通
- 六、聚 落

を示すと次の如くである。

A、密度の大きい町村(六十五人以上)

五丁田村 六九・五 農村

神埼町 六九・〇 商・農

打上村 六七・一 農村

名護屋村 六五・九 漁・農

境野村 六五・六 農村

B、密度の小なる町村(五十人以下)

龍王村 四七・〇 農村

北波多村 四七・二 炭坑地

相知村 四七・九 〃

北方村 四八・一 〃

唐津町 四八・二 商・工

有田町 四八・四 製陶・商

値賀村 四八・八 漁・農

大町村 四九・〇 炭坑地

註 1

第四十八回帝國統計年鑑によれば一世帯に付き人口

数は、内地平均五・〇人、佐賀縣は五・三である。最

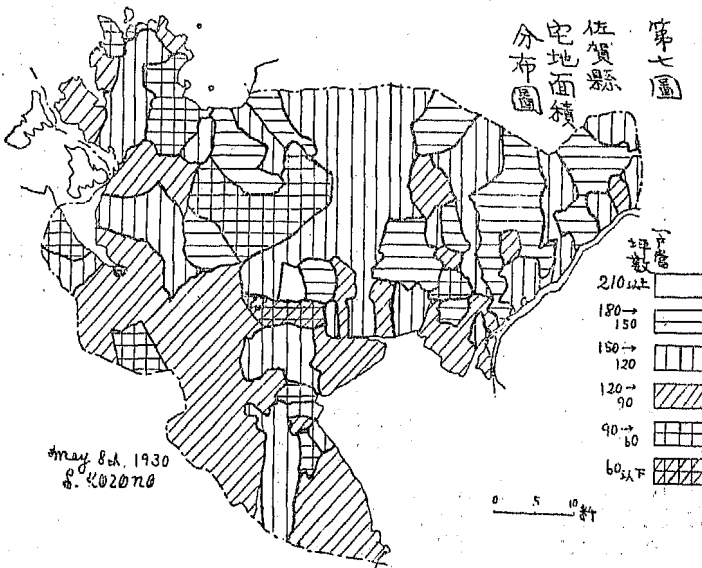
も大きいのは山形六・一、宮城六・〇、で最も小さい

のは島根四・一である。

第七圖は市町村別一戸當り宅地面積の分布で

第七圖

佐賀縣  
宅地面積  
分布圖



May 8th, 1930  
G. Kodono

ある。階級區分にメートル法を用ひなかつたのは既に發表された研究文との比較に便せん爲である。筑紫平野の農業地方及び脊振山地は廣い宅地を有するが、佐賀、鳥栖、唐津、伊萬里、鹿島の商工地、古枝の門前町、大町・北方・嚴木・相知・北波多・西山代の炭坑地、名護屋・呼子・湊の漁村、有田の製陶地等は狭い宅地に甘んじなければならぬ。宅地の狭小な町村と廣大な町村を示すと次の如くである。

A、狭小な町村(三畝以下)

大町村	三〇・四 <sup>坪</sup>	佐賀市	七七・三 <sup>坪</sup>
北方村	四九・五	古枝村	七九・三
相知村	六〇・二	有田町	八一・三
唐津村	六三・〇	名護屋村	八一・八
嚴木村	七二・〇	佐志村	八一・八
呼子村	七二・四	伊萬里町	八一・八
唐津町	七二・八	龍王村	八九・四
西山代	七四・八	有田村	八九・八

B、廣い町村(五畝以上)

多久村 二一五・九<sup>坪</sup> 三瀬村 一五四・四<sup>坪</sup>  
 金立村 一七八・二 三川村 一五四・三  
 麓村 一六九・五 東脊振村 一五三・四  
 南多久村 一六七・三 大川村 一五三・四  
 三日月村 一六四・八 玉島村 一五二・七  
 鍋島村 一六三・八 本庄村 一五二・四  
 仁比山村 一五九・四 境野村 一五二・二  
 北茂安村 一五九・三 鏡村 一五一・二  
 東川副村 一五八・九 三田川村 一五一・一  
 川上村 一五七・六 久里村 一五七・二  
 田代村 一五〇・七

多久村の一户當り七畝を越すのは舊武家屋敷多く、且つ商家の少いのである。大町・北方が一畝及一畝半の小宅地になるのは、現在稼業中の炭坑中心地なる爲に、労働者の長屋住居が多いのが最大原因であるらしい。有田町・村は農家少く、有田川峽谷に沿うた爲廣い宅地の餘裕なく呼子・名護屋は丘陵地沈降海岸の特色をよく示し、平地少く、傾斜面に幸じて

漁村が出来てゐることを現はしてゐる。

第五、六圖を地球第十三卷第一號所載の第一、二、三、四圖と比較研究し、第六圖及本文の氣候條件等を參考とすれば、佐賀縣地方人口分布及生活の一端を推察することが出来るであらう。主な項目を摘記すれば次の如きものである。

A、筑紫平野は農を主業としてゐるが人口密度極めて大で、飽和點に達し、或は飽和點近くにある町村も少くない。(勿論現在の社會狀態、産業組織に於て斯くいへるのみであるが)

B、現住人口は本籍人口より少く、毎十戸當人口は五十五人以上で、殊に神埼・境野兩町村にては六十五人以上である。<sup>註2</sup>  
 C、宅地・田地の一戸當り面積は普通以上で田地にては一町歩を越え最も割合の大きい地である。<sup>註3</sup>然し、小作地も相當の割合を占めてゐる。

D、右の中、鳥栖・基山地方は田地の割合稍々小さく、小作地は半以上に及び、人口

多く、且つ舊藩時代の政治の方法等の關係から、小作爭議の頻發する理由も幾分か了解されるであらう。

E、鳥栖・佐賀は市街地をなし、他よりの寄留者多く、人口密度も一千人以上に達するが、一戸當人口、宅地面積は餘り大でない。

F、脊振山地は田地の割合は稍々小さいが、自作地が多く、宅地は四畝以上で、一戸當人口は平均數近く、人口密度は甚だ小さい。

G、七山・三瀬の兩村は田地面積(一戸當)廣く自作地多く、宅地も廣いが、一戸當人口は少ない。

H、松浦炭田地は炭坑地・松浦川沿岸及び海岸地のみ人口密度大で、宅地面積は小さい。田地は狭く、自作地が半以上である。

I、呼子・名護屋地方は、田地は自作地が多いが面積狭小で、宅地も小さく、一戸當人口は多い。而して人口密度も大きい。

J、現住人口は本籍人口より多く、炭坑地の勢力需要をあらはしてゐる。

K、大町村・北方村・相知村は現住人口は本籍人口より五十%以上も多く、宅地は二畝を越えない。十戸當り人口は五十人に達しないが、人口密度は大きく、大町村の如きは、現住人口は本籍人口の二百四十五%、一戸當宅地面積は三十坪四合、十戸當人口四十九人、人口密度は一方軒一千百九十人である。

L、多良岳火山裾野は田地狭く、小作地多く宅地も四畝以下である。然し、一戸當り人口少く、人口密度も小さい。

M、多良村は田地一戸當五反七畝、自作地は二十一%、宅地は一戸當百坪、十戸當人口五十一人九で、人口密度は一方軒百十六人である。

註<sup>2</sup>

女百に付き男人口は内地では東京府百十三・八%で最も多く、北海道、神奈川、大阪のそれより百九・四%、百九・三%、百八・八%が之に次いでゐる。最

佐賀縣の地理

も少きは沖繩縣の九十二%五で、鹿児島、滋賀の共に九十四%一が之に次いでゐる。佐賀縣は九十六%五である。右のことを深く研究するならば如何なる地が人口増加し、如何なる地が人口増加の停滞或は減少の傾向あるか知り得るであらう。勿論此の場合には現住人口の増加と、本籍人口の増加とは區別しなければならぬ。

註<sup>3</sup>

内地にては一戸當平均にて田地は五反六畝、宅地は百坪六合で、佐賀縣は田地は七反九畝、宅地は百十坪七合である。(内地宅地平均は一世帯に付き)

## 七、地理區

### 八、結語

前述した要項は私の旅行、文獻によつて得た事項と何等の矛盾なく一致する。故に、他の例證をあげて參考となし、説明にまで進まんと考へたこともあつた。然し乍ら、初めの考が説明にまで進む目的を有しなかつたから、記述を主とした。此には地理學的研究法によらんと努めたのみであつて、地理學的研究を終へたのではないことを明かにして置く。地理學的研究は地誌學的研究でなければならぬ。地誌學的研究

は地理區によらなければならぬ) 地誌研究家諸賢の御批評と御指導を仰ぐことを得れば幸甚である。

(仲原善忠先生は御多忙にも拘らず、御校閣下され感謝の他なし)

主な参考文献 (二)

- 1、佐賀縣氣候表 佐賀測候所
- 2、北海道の氣候學的研究 地評 五ノ九 福井英一郎
- 3、根室地方の氣候と農業 地評 五ノ十二 全
- 4、農業 現代産業叢書 那須 皓
- 5、日本地形誌 辻村太郎
- 6、日本民家史 藤田元春
- 7、The density of population of Belgium, Luxembourg and Netherland.
- 8、Business Geography Geographical Review.
- 9、五萬分一、二十萬分一地形圖 E. W. Huntington.
- 10、大阪府下の灌漑農業 山極二郎 地理學評論四ノ十一・十二

山崩れ及び地這りの特性と其の重要性

本 間 不二男

緒言 山崩れ或は地這りと言はるる地質現象の研究は我が國土に於いて、甚だ重要であるのに此の研究は今日迄比較的少く、地形學や地質學の教科書にも全く記載されてゐないか或は僅

に記載されてゐるばかりである。此の方面に關する最近の研究として特に顯著なものは渡邊貫氏の山崩の分類であるが、地質學雜誌八月號の雜錄に理學士中村慶三郎氏の山崩れの調査が又